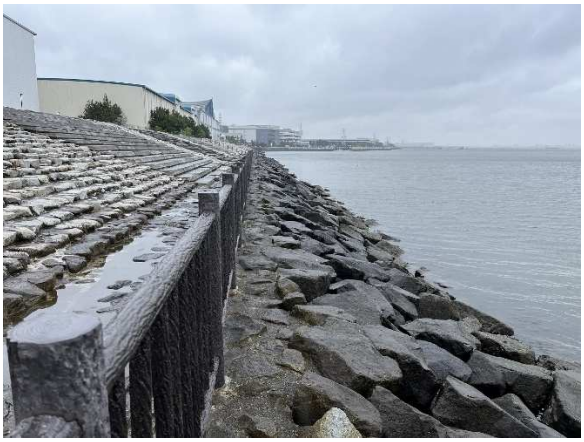
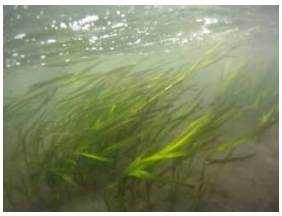
回想「豊穣の海」

三番瀬 聞きとり調査レポート





2025 年 3 月

特定非営利活動法人 三番瀬フォーラム

東京海洋大学　沿岸域管理研究室

本レポートは、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて制作しました。

はじめに

東京湾三番瀬（さんばんぜ）は、千葉県市川市・船橋市の沖合に広がる干潟・浅瀬である。

かつては埋立計画があり、その後は再生計画をめぐって度々マスコミでも取り上げられたために、全国的に知られた海である。その一方、都市化され、周囲は埋め立てられ、幹線道路や工場地帯に囲まれてしまったために、地元でこの海を知っている人は決して多くない。

また、東京湾でかろうじて残った貴重な干潟・浅瀬である一方、青潮の頻発、ヨシ原やアマモ場の消失、アサリに代表される漁獲物の減少など、課題の多い海でもある。

この海をこれから先どうすべきなのだろうか。

それを考える際に、少なくとも、かつての海がどのような状況であったかを知ることが大切ではないか。なぜなら、過去の開発により、三番瀬の陸側の海域（潮上帯や潮間帯上部等）は既に埋め立てられ、現在残る海域の環境も大きく変貌しているからである。かつての自然環境とその利活用の状況を知り、それらを踏まえた海の再生と街づくりを考えるべきではないだろうか。

現在、地元の市川市が、三番瀬の塩浜地先の海域において覆砂による干潟再生に向けた事業を実施しようとしている。地元の漁師や元漁師と話していると、かつてのこの海域の状況のこともよく出てくるが、必ずしも一般には知られていない。

そこで、かつての塩浜地先及びその周辺の海域の状況についてもしっかりと記録に残し、これからの再生策を議論する際のツールの一つとして広く活用すべきだと考え、市川市の漁師や元漁師の方々への聞きとり調査を行い、この度、本調査レポートをとりまとめた。

話を聞かせていただいた漁師や元漁師の皆さんには、この調査の趣旨に賛同いただき、快くご協力いただいた。心から感謝申し上げたい。

2025 年 3 月

特定非営利活動法人 三番瀬フォーラム
理事長　安達　宏之

東京海洋大学　沿岸域管理研究室
教授　川辺　みどり

目次

はじめに

１　行徳地域の漁業の歴史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

塩のまち・行徳　／　海苔養殖の始まり　／　行徳地域での海苔養殖　／
半農半漁の漁業地域・行徳　／　海苔養殖の技術革新　／　押し寄せる
工業開発の波　／　行徳地域の埋め立て　／　宙に浮いた市川二期計画
／市川二期計画の再浮上と埋め立ての「白紙撤回」　／　「白紙撤回」で
残された課題　／　漁業の再生に向けて
◆行徳地域の漁業の歴史・関係年表　◆三番瀬の地形の変遷

２　海苔漁が盛んだったころ　～篠田務さんの話　・・・・・・・・・・・・・・11

海苔漁とハスの栽培　／　ナガモ（アマモ）の下には無数のイシガニ　／
どこまでも干潟が続く海　／　水が悪くなり、カキが付き始めた　／
妙典・行徳のハスと小学校

３　市川の沖でアサリが豊漁だったころ　～藤原孝夫さんの話　・・・・・・16

手漕ぎの船で１時間かけて漁場へ　／　海苔漁場も干潟だった　／
塩浜の前も当時は天然の干潟

４　「めっぽり」の海、腰捲き漁の海　～御代川薫さんの話　・・・・・・・・・20

楽しみな川と海　／　海で「めっぽり」をしていた　／
塩浜の地先での腰捲き漁から底曳き漁へ

５　塩浜前は干潟だった　～澤田洋一さんの話　・・・・・・・・・・・・・・・27

ハマグリをとりに干潟へ　／　浦安も行徳も干潟が広がっていた　／
海苔ひびに覆われていた行徳の海　／　行徳で遊船を始めた頃の海　／

６　聞きとり調査結果をもとに、これからの三番瀬と街づくりを考える　・・32

塩浜地先の海域は干潟だった　／　調査結果から市川市の覆砂事業を
考える　／　ネイチャーポジティブの時代、三番瀬の再生へ

表紙写真（左上から）

上段左：覆砂による干潟再生が計画されている市川市塩浜の護岸。護岸直下の海域は水深が深く、また護岸からは海水に触れることもできない。上段中央上：ふなばし三番瀬海浜公園の人工干潟。上段中央下：市川市漁協と三番瀬フォーラムによる再生アマモ場（2023 年）。上段右：小学校の海苔すき体験で話す藤原孝夫氏。下段左：聞きとり調査中の篠田務氏。下段中央：現在の海苔ひび。下段右：いちかわ三番瀬まつり（2024 年 10 月）。

1　行徳地域の漁業の歴史

塩のまち・行徳

千葉県市川市の行徳地域※の漁業のあゆみは、江戸時代に塩のまちとして発展した行徳の歴史を抜きに語ることはできない。1590（天正 18）年、江戸に入城した徳川家康は、江戸近郊の製塩地であった行徳を直轄領とし、行徳塩田を保護・育成するとともに、行徳塩を江戸に運ぶための運河も造らせた。これを機に、行徳は塩と水運のまちとして発展してゆく。江戸時代中期以降、塩づくりの中心は瀬戸内地方に移っていくものの、行徳は関東・東北での塩の産地として江戸時代を通して重要な地位にあった。この時代、行徳地域でも漁業はおこなわれていたが、漁師町であった浦安や船橋とは違い、より自給的な色彩が強いものであった。

※ 行徳地域：本レポートでは、三番瀬に接する市川市南部の区域を指す。

海苔養殖の始まり

東京湾での海苔養殖は、江戸時代中期、1700 年前後に品川沖で始まったとされている。隅田川などの河口付近は栄養塩が豊富で、ノリの生育に適していた。千葉県では、1821（文政 4 年)、江戸の海苔商人であった近江屋甚兵衛が上総・人見村の小糸川河口で養殖に成功し、遠浅の干潟に恵まれていた東京湾内湾一帯に広がっていった。

行徳地域での海苔養殖

千葉県東葛飾郡の東京湾沿岸地域で海苔養殖が始まったのは、明治時代に入ってからのことである。浦安では 1886（明治 19）年に深川・越中島地先の海面に許可をもらい、海苔養殖を始め、1898（明治 31）年には浦安地先の海面でも養殖の許可を得た。また、浦安と船橋の入会漁場である海面では、1901（明治 34）年に浦安と船橋の漁業組合が共同で海苔養殖の許可を千葉県から得ている。1902（明治 35）年に旧漁業法が施行されると、行徳町と

南行徳村でも漁業組合が結成され、海苔養殖への気運が高まった。

しかし、1905（明治 38）年に塩の専売制が施行され、行徳地域は塩業優先とされたため、行徳と南行徳の漁業組合による海苔養殖の漁業権は承認されなかった。このため、両組合は 1909（明治 42）年、浦安と船橋の漁業組合から海面の一部を借り受け、海苔養殖を始めることになった。これ以降、行徳地域では、海面を借り受け、入漁料を払っての海苔養殖が 1950（昭和 25）年まで続くことになる。

半農半漁の漁業地域・行徳

塩の専売制は、日露戦争の戦費調達と塩の安定供給のために実施されたが、専売制移行後も塩の価格は安定しなかった。このため、政府は 1910（明治 43）年から生産性の低い塩田を廃止する塩業整備を実施し、古い塩田が多い行徳地域の塩業は衰退の道を辿った。さらに 1917（大正 6 ）年の台風による高潮は、行徳地域の塩田に壊滅的打撃を与えた。これ以降、高潮の被害を受けた行徳の水田では、塩害に比較的強いハスの栽培に転換するところが次第に増えていった。

専業漁家が多い浦安や船橋と違って、行徳地域では米作や野菜の栽培を行う傍ら、冬期に海苔養殖を行う半農半漁の漁家が多かった。ハスの栽培は、こうした漁家の重要な収入源となり、一面に広がる蓮田は行徳地域を象徴する風景の一つとなった。また、この時期には、レンコンをはじめとする野菜類の東京下町への行商も盛んになっていった。塩業の衰退以降、行徳地域では海苔養殖の重要性が高まり、漁民たちによる漁場開拓の努力もあったが、旧漁業法の下では独自の漁業権を獲得するには至らなかった。

海苔養殖の技術革新

1950（昭和 25）年、新漁業法が施行され、行徳と南行徳の漁業協同組合は念願の共同漁業権と区画漁業権を獲得し、1951（昭和 26）年より入漁料不要の独自の漁場で操業することが可能になった。これと時を同じくするかのように、海苔の養殖は技術革新の時代を迎える。1949（昭和 24）年、イギリスの海藻学者キャサリン・ドリューがノリの生活史を解明した。春に海中に放出されたノリの果胞子は、貝殻に穿孔して糸状体となって夏を過ごし、秋になって海水温が低くなると糸状体から殻胞子が放出されて、海水中の個体に付着して発芽、生長していくことがわかった。長年、海苔は「運草」とも呼ばれ、秋口にどこで海苔の種を付けられるかが海苔養殖のポイントとなっていた。しかし、ノリの生活史の解明により、

ノリの果胞子を牡蠣殻に付け、これを種付けに使用する人工採苗の技術が開発されて、海苔養殖は飛躍的発展を遂げることになった。1960（昭和 35）年度には行徳地域の海苔生産枚数もこれまでの最高の約 2 倍にあたる 3893 万枚に達する。

1960 年代には、海苔養殖の技術革新はさらに進み、種付けをした海苔網を冷蔵保存して、海況の変化に対応して養殖をすることや、水深が深い所でも海苔網をアンカーで固定して養殖するベタ流し（浮き流し式）も可能になったが、これらの技術は高度経済成長期の工業開発に対応する意味をもつものでもあった。

押し寄せる工業開発の波

1950（昭和 25）年、千葉県は千葉市の旧日立航空機工場の跡地に川崎製鉄（現 JFE スチール）を誘致することを決定し、京葉臨海工業地帯造成の道が開かれた。1958（昭和 33）年には浦安から五井までの 3305ha を埋め立てる京葉臨海工業地帯造成計画が正式に決定され、1960（昭和 35）年には計画面積は浦安から富津岬までの 11,240ha に拡大された。

行徳地域の東側にある船橋市では、1949（昭和 24）年に市の計画に基づいて船橋ヘルスセンターの用地（38ha）の埋め立て工事が開始され、1956（昭和 31）年からは工業用地（172ha）の造成工事も始められた。さらに、ヘルスセンター前面の土地造成計画も立てられ、船橋漁協は 1962（昭和 37）年に漁業権の一部を放棄している。一方、行徳地域の西南側にある浦安町では、1961（昭和 36）年から 1972（昭和 47）年にかけて第一期埋め立て造成工事成（195ha）が行われ、浦安漁協は 1971（昭和 46）年に漁業権を全面放棄した。さらに浦安地区では 1980（昭和 55）年までの第二期埋め立て造成工事も行われ、町の面積は埋め立て前の 4.43 ㎢から 16.98 ㎢へと 4 倍に増大した。

行徳地域の埋め立て

市川市での埋め立ては、市の単独事業として高谷地区で 1959（昭和 34）年に始まり、1974（昭和 49）年に竣工した塩浜地区まで、393ha の用地が造成された（市川一期埋立事業）。埋め立て工事が始まると、まずウナギやアナゴを獲る筒置き漁が影響を受けるようになった。海苔養殖も工場からの廃水による水質汚濁や重油の流失などのため、1960（昭和 35）年頃からは毎年のように被害を受けるようになった。埋め立て関係では数回の漁業補償が行われたが、その他の海洋汚染については加害者を特定できずに無補償で終わるケースが多かった。さらに、行徳地域では 1960（昭和 35）年頃から地下水や天然ガスの汲み上げのために急激

な地盤沈下が起こり、広大な干潟が水没してしまった。

こうした中で、海苔の生産枚数は 1973（昭和 48）年度の 5873 万枚をピークに減少し、ハマグリも 1976（昭和 51）年以降は漁獲高ゼロとなった。しかし、急速に進んだ埋め立て造成も 1973（昭和 48）年のオイルショックで急ブレーキがかかる。1971（昭和 46）年の浦安漁協に続いて、1973（昭和 48）年には船橋漁協も漁業権を全面放棄したが、行徳地域の 2 つの漁協は漁業権の全面放棄に至らぬうちにオイルショックを迎えることになった。

宙に浮いた市川二期計画

市川一期埋立事業以降、市川市は千葉県の市川二期計画に期待を寄せていた。しかし、オイルショックにより市川二期計画は凍結された。市川一期の事業はすべて市川二期計画の実施を前提としていたため、塩浜地区の護岸はどこも鋼矢板の直立護岸となり、1971（昭和 46）年に暫定的に整備された漁港も登録漁船の過半数が係留できない手狭なものであった。厳しい漁業生産条件が続く中、行徳地域の 2 漁協は 1982～83（昭和 57～58）年、塩浜の漁港地先に約 10ha の人工干潟を造成し、養貝場および潮干狩り場として利用し始めた。潮干狩り場は年間 10 万人もの入場者で賑わったが、1985、86（昭和 60、61）年と連続して青潮※による大きな被害を受け、わずか 4 年で幕を閉じることになった。

※ 青潮：航路や埋め立て工事の際に海底の砂を採取してできた土採り穴など東京湾の深みに溜まった貧酸素水塊が、北東風が吹いた時に湧昇する現象。

市川二期計画の再浮上と埋め立ての「白紙撤回」

1980 年代後半のバブル期、日本の各地でウォーターフロント開発計画が発表され、1986（昭和 61）年には千葉県も「市川二期基本計画案」を発表し、同時に船橋側の「京葉港二期基本計画案」も示された。こうして再び市川二期計画は息を吹き返し、1993（平成 5）年には千葉県が三番瀬海域 740ha を埋め立てる「市川二期・京葉港二期基本計画」を決定した。この計画に対して行徳地域の 2 漁協は埋立地の沖に新たな漁業権を設定することを要求した。しかし、この時期には既にバブル経済も崩壊して、既存の埋立地にも余剰な用地が生じており、埋立計画自体も十分な説得力を持つものではなかった。また、市民の環境意識も高まり、三番瀬の保全を求める世論が強くなっていった。1996（平成 8）年に幕張メッセで開催された環境シンポジウムでは、岩垂寿喜男環境庁長官が「三番瀬の環境を何としても守り

抜いていただきたい」と発言し、船橋市や市川市などの地元行政も次第に三番瀬保全の方向にシフトしていった。

1999（平成 11）年 1 月には、千葉県の二期計画に係る補足調査専門委員会も「740ha の埋め立ては三番瀬の自然に対する影響が大きい」と報告し、同年 6 月、千葉県は 101ha に縮小した新たな三番瀬埋立計画案を発表した。しかし、この縮小案に対しても、高架式の第二湾岸道路計画などについて環境庁から懸念が表明され、2001（平成 13 年）には新たに就任した堂本暁子千葉県知事が三番瀬埋立計画の「白紙撤回」を表明した。こうして「市川二期・京葉港二期基本計画」による三番瀬の埋め立てはなくなったが、行徳の海と陸は市川一期までの状態のまま残されることになった。

「白紙撤回」で残された課題

1980 年代以降、行徳地域では急速な都市化が進むとともに、漁業を取り巻く環境も厳しさを増していった。とくに浦安二期埋め立ての完成によって潮流が遮られる形となった猫実川河口周辺の海域は、底質がヘドロ化して漁場として利用できない状態になった。また、塩浜の護岸ではプレジャーボートの不法係留や沈船の放置が数多く見られ、護岸の鋼矢板も腐食して危険な状態になるなど、問題が山積していた。こうした問題の解決も含め、三番瀬の保全・再生と行徳臨海部のまちづくりは市川市の喫緊の課題となった。

2002（平成 14）年、市川市は「行徳臨海部基本構想」を策定して、海域の自然環境・漁業環境の保全と再生、市川塩浜駅周辺を海辺の街として再整備などの基本方針を掲げて、その実現に向けて動き、海岸管理者である千葉県に要望を繰り返したが実現に至らなかった。2023（令和 5）年に市が干潟再生のための覆砂を行う市単独事業の計画を打ち出すまでに約 20 年の歳月を要した。

漁業の再生に向けて

1998（平成 10）年に 142 戸あった行徳地域の漁家は、2023（令和 5 ）年には 57 戸にまで減少した。長年、行徳地域の漁業は海苔養殖と採貝が中心であったが、海苔養殖を営む漁家は、同じ期間に 50 戸から 4 戸へと激減している。近年は温暖化の影響で冬期に海水温が下がらず、クロダイなどによる食害も増えるなど、海苔養殖は厳しい状況に置かれている。また、採貝では、アサリの漁獲量が激減して、2018（平成 30）年以降ゼロとなった。21 世紀に入って、三番瀬では外来種のホンビノスが採貝の主力となったが、その漁獲量も 2020（令和 2）年以降急減している。

こうした状況の中で、2018（平成 30）年、行徳漁協と南行徳漁協は統合して、市川市漁業協同組合として再出発することになった。また、2020（令和２）年には、塩浜１丁目に念願であった新しい市川漁港が完成した。新漁港では 2023（令和５）年から市川市と共催で秋に「いちかわ三番瀬まつり」が開催され、2024（令和６）年からは毎月第一日曜日に漁協主催の朝市が開かれて、多くの市民が訪れるようになった。こうしたイベントの中では「ボサ漁（柴漬け漁）体験」や「漁場クルーズ」なども行われ、市民に三番瀬の漁業をアピールする場となっている。また、市川市漁協は 2023（令和５）年から、市川市や NPO（三番瀬フォーラム）とともに行徳人工干潟でのアマモ移植の実証実験にも取り組んでいる。市川市漁協は、60 歳未満の漁業従事者が過半数を占め、県内でも若い担い手が比較的多い漁協である。行徳地域の漁業は、いま再生に向けての一歩を歩み出したところである。

聞きとり調査にあたって

以上のような行徳地域の海の変遷を現場で体験してきた市川市の行徳地域の漁師・元漁師の方々を対象に、2024 年 8 月から 2025 年 3 月にかけて聞きとり調査を行った。次章以降にその内容をまとめる。快く調査に応じていただいた 4 名の方々には、重ねてお礼を申し上げたい。なお、取りまとめに当たっては細心の注意を払ったものの、かなり昔の話であり、文献も少ないことから記述が不十分な箇所もありうる。この点をご理解いただければ幸甚である。

参考文献

○『市川市史４巻』（市川市、1975 年）

○『市川市史 歴史編Ⅳ 変貌する市川市域』（市川市、2020 年）

○小室正紀編著『地図に刻まれた歴史と景観２－明治・大正・昭和　市川市・浦安市』（新人物往来社、1992 年）

○行徳漁業協同組合『行徳漁業のあゆみ』（行徳漁業協同組合、1983 年）

○市川市役所農水産課『市川の海苔づくり』（市川市、1995 年）

○市川市立歴史博物館『行徳の塩づくり』（市川市立歴史博物館、1983 年）

○市川市建設局都市政策室『三番瀬の再生に向けて－地元市川市の挑戦』（市川市、2003 年）

○宮下章『ものと人間の文化史 111～海苔』（法政大学出版会、2003 年）

○浦安市郷土博物館『海苔のできるまで』（浦安市郷土博物館、2020 年）

○小埜尾精一・三番瀬フォーラム『東京湾三番瀬 海を歩く』（三一書房、1995 年）

○三番瀬フォーラム『三番瀬から日本の海は変わる』（きんのくわがた社、2001 年）

○NPO 法人三番瀬環境市民センター『海辺再生 東京湾三番瀬』（築地書館、2008 年）

○『市川二期地区・京葉港二期地区に係る補足調査結果の概要について』（千葉県土木部・千葉県企業庁、1999 年）

○「2023 年漁業センサス」（農林水産省、2024 年）

○『令和 6 年版 市川市統計年鑑』（市川市ウェブサイト）https://www.city.ichikawa.lg.jp/gen01/0000451351.html

○「市川漁港整備事業基本計画」（市川市ウェブサイト）https://www.city.ichikawa.lg.jp/gyo06/1111000059.html

○「市川市の水産業」（市川市ウェブサイト）https://www.city.ichikawa.lg.jp/eco02/1111000022.html

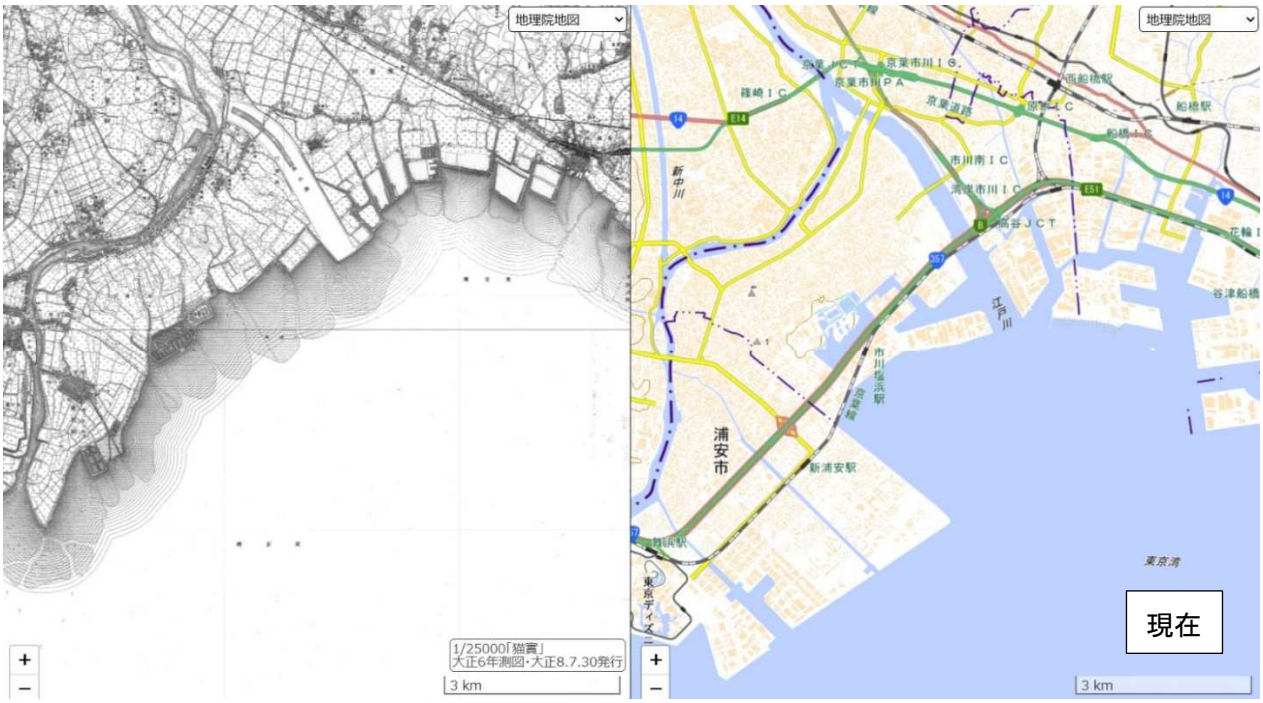
◆行徳地域の漁業の歴史・関係年表

1590（天正 18）	徳川家康、江戸入城⇒行徳塩田を保護・育成
1902（明治 35）	行徳浦漁業組合結成⇒1903 年、行徳町漁業組合として県より認可
1903（明治 36）	南行徳村漁業組合設立
1905（明治 38）	政府、塩の専売制開始 ⇒行徳地区は塩業優先指定、行徳・南行徳の漁業組合の海苔養殖漁業権は不承認
1909（明治 42）	浦安と船橋の漁業組合より海面を借り受け⇒行徳で海苔養殖が開始
1910（明治 43）	利根川大洪水、東京の下町はじめ利根川流域で大被害
1911（明治 44）	利根川大改修工事開始（～1930 年まで）
1916（大正 5）	江戸川放水路開削工事着工（～1920 年竣工）
1917（大正 6）	台風による高潮被害で行徳塩田は壊滅的打撃 ⇒これ以降、ハスの栽培が徐々に広がる（ハスの生産は 1985 年まで）
1929（昭和 4）	行徳塩田が政府の第 2 次塩業整備の整理対象に（最後の塩田は 1949 年まで残る）
1936（昭和 11）	この頃より海苔養殖は粗朶篊（そだひび）から網篊に移行
1949（昭和 24）	イギリスの海藻学者キャサリン・ドリューがノリの生活史解明 ⇒1950 年から海苔養殖での人工採苗法が始まる
1950（昭和 25）	新漁業法により行徳、南行徳漁協の共同・区画漁業権が確定 ⇒1951 年より漁場借用料不要の独自漁場が使用可能に
1958（昭和 33）	千葉県、京葉臨海工業地帯造成計画策定 ⇒浦安から五井まで 3305ha、1960 年に富津岬までの 11,240ha に拡大
1959（昭和 34）	市川市の単独事業として第 1 次埋立工事(高谷新町・二俣新町）開始
1960（昭和 35）	行徳漁協と南行徳漁協の海苔生産枚数が過去最高の 2 倍に（3893 万枚） この頃より行徳地区および地先の海域で地盤沈下が進行する
1961（昭和 36）	行徳漁協にノリの糸状体培養場設置、人工採苗が本格化 行徳地先の埋め立てが京葉臨海工業地帯造成計画の一環として位置づけられる 浦安地区一期埋立工事開始（～1972 年、浦安二期埋め立て 1972～1980 年まで）

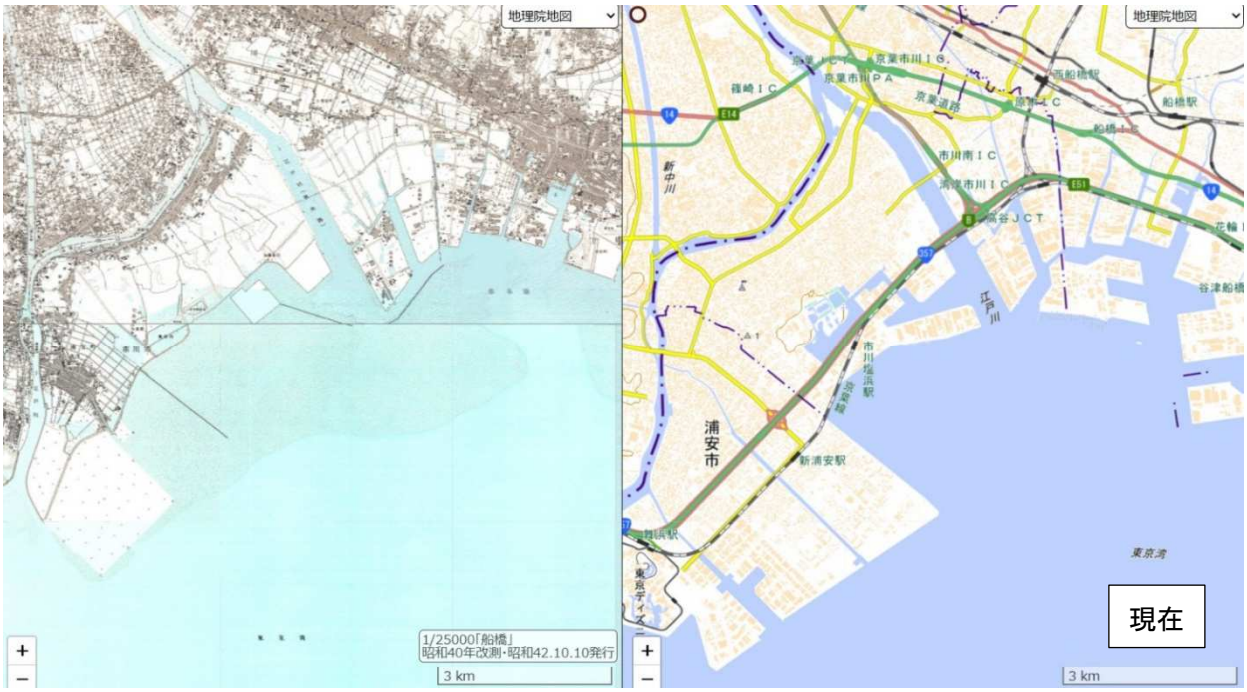
1963（昭和 38）	千葉県、京葉臨海工業地帯の一環として三番瀬埋立計画を策定 ノリ種網の冷蔵保存（冷凍保存網）始まる
1969（昭和 44）	地下鉄東西線・東陽町～西船橋間開通、行徳駅開業⇒宅地開発が進む 千葉県の市川一期地区（塩浜 1～4 丁目）埋立工事開始（～1975 年竣工） 海苔の浮き流し式養殖（ベタ流し）が普及
1971（昭和 46）	浦安漁協、漁業権全面放棄 塩浜 1 丁目に市川漁港整備（二期埋め立てまでの暫定措置）
1973（昭和 48）	行徳地域の海苔の生産枚数がピークに（5873 万枚） 船橋漁協、漁業権全面放棄 第 1 次オイルショック⇒三番瀬埋立計画は立ち消えに
1982~83 （昭和 57~58）	行徳漁協・南行徳漁協、塩浜地先に約 10ha の人工干潟造成（養貝場、潮干狩り場） ⇒青潮被害などにより潮干狩り場は 1986 年で使用終了、閉鎖
1983（昭和 58）	浦安に東京ディズニーランド開園
1986（昭和 61）	千葉県、市川二期基本計画案発表
1993（平成 5）	千葉県、市川二期・京葉港二期基本計画策定（740ha の埋立計画）
1999（平成 11）	千葉県、三番瀬埋立計画の縮小案（101ha）
2001（平成 13）	千葉県、三番瀬埋立計画白紙撤回
2002（平成 14）	市川市、行徳臨海部基本構想策定（三番瀬の再生とまちづくり）
2018（平成 30）	行徳漁協、南行徳漁協が統合⇒市川市漁業協同組合
2020（令和２）	市川漁港完成
2024（令和６）	市川漁港での朝市始まる（毎月第一日曜日）

三番瀬の地形の変遷

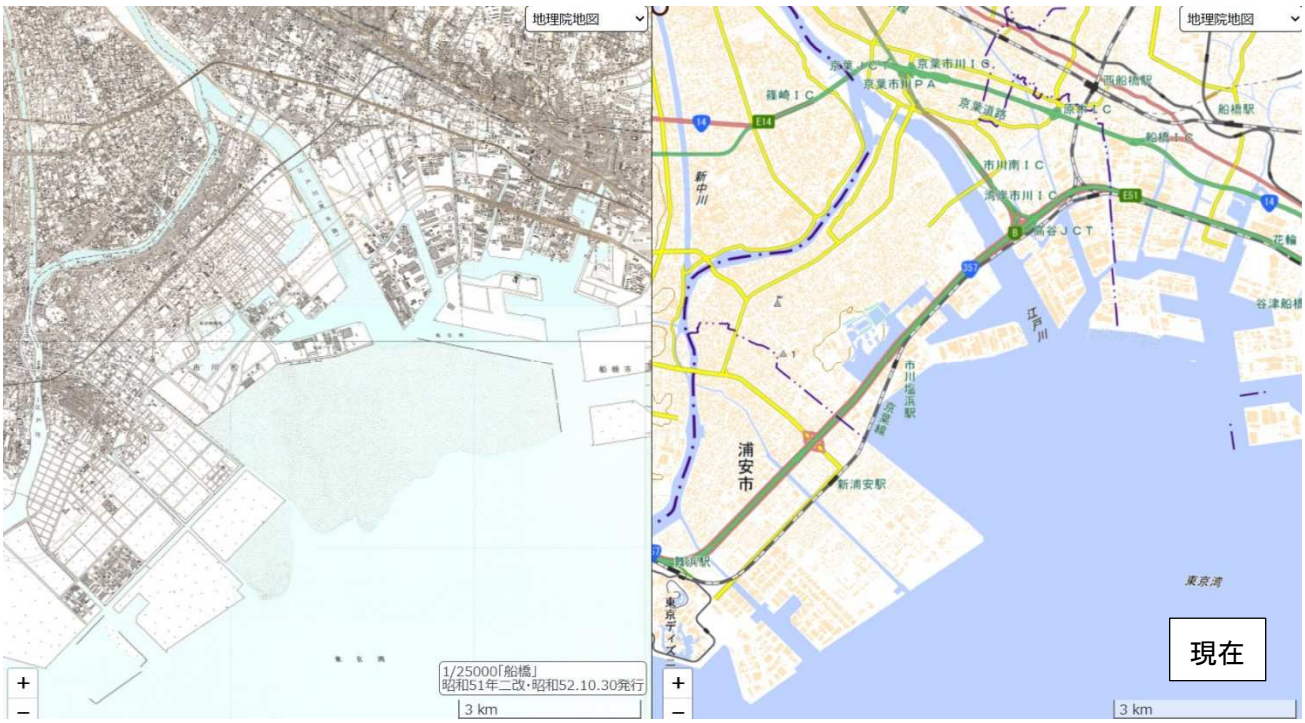
時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷　謙二）より、三番瀬の地形の変遷を年代順に示した。各図の左側がかつての地形図、右側が現在の地形図である。



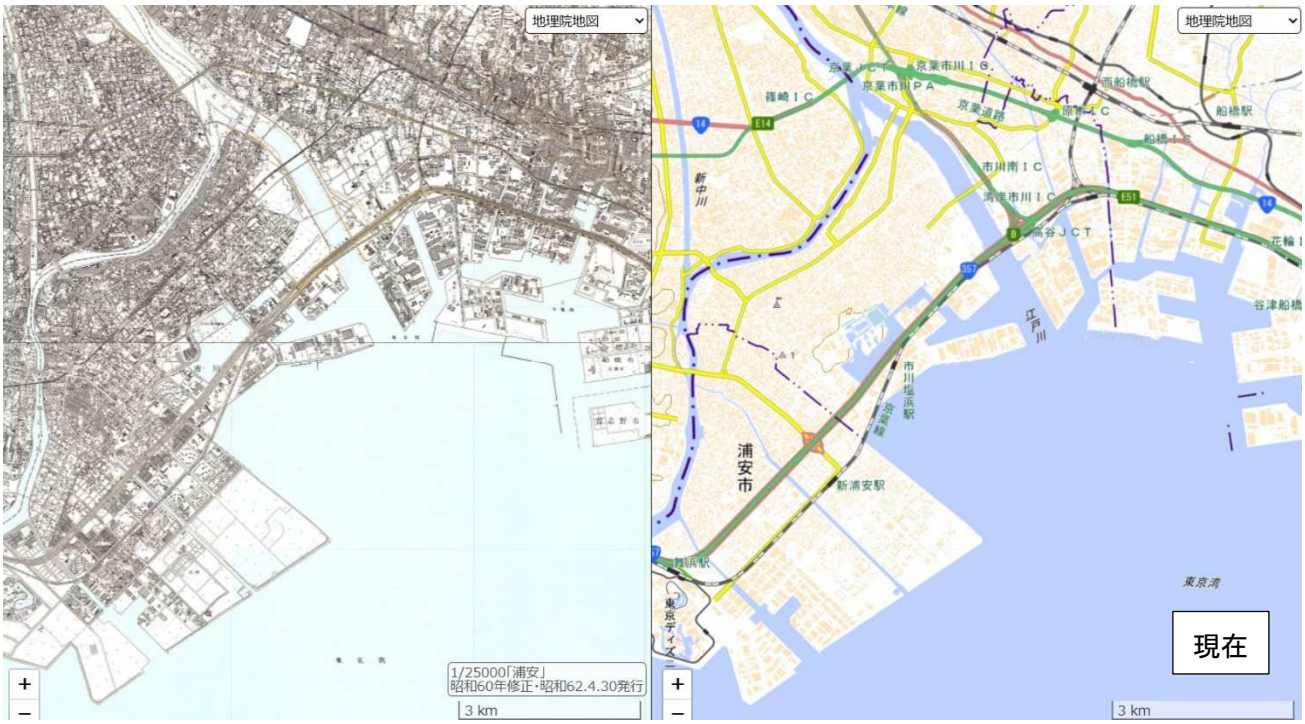
大正 6 年（1917 年）の頃。江戸川放水路が開削されている（大正 5 年から 9 年にかけて開削）。



昭和 40 年（1965 年）の頃。高度経済成長期となり、三番瀬周囲の埋め立てが進みつつある。



昭和 51 年（1976 年）の頃。現在のふなばし三番瀬海浜公園は航路（後に覆砂し、人工干潟を造成）。



昭和 60 年（1985 年）の頃。ほぼ現在の地形へ。

2　海苔漁が盛んだったころ

篠田（しのだ）　務（つとむ）さん

元海苔漁師、元ハス農家

1936 年（昭和 11 年）生まれ

海苔漁とハスの栽培

市川市妙典で生まれ育った。小学生の頃、友だちとべか舟に乗って海へ行き、野菜の肥料用にナガモ（アマモ※）を採ったりしていた。

※ アマモ：主に浅い砂質の海底で生長するイネ科の種子植物であり、海草の一種。アマモ場は、海中に酸素を供給し、生物の産卵や幼少期の生育の場としての役割を果たすため、「生きもののゆりかご」とも呼ばれる。

小学校４、５年生の頃（昭和 22 年〔1947 年〕、23 年〔1948 年〕）、塩田の手伝いをしたこともある。夏休みに小学校で引率されて塩田に行き、砂や海水を運んだ記憶がある。

中学を卒業し、野菜の行商を始めた。妙典からリヤカーに野菜を積み、自転車でそれを引っ張って東京まで売りに出かけていた。

二十歳頃からは、ハス田の栽培や海苔漁も始めた。現在の妙典小学校は私のハス田の一部だった。それからは、４月にハスを植え、６月から８月まで行商に出る。９月から冬場にかけては海苔漁をしていた。また、一年を通して野菜をつくっていた。海苔漁では、漁の準備や収穫後に板海苔にする加工作業など、陸上での作業もたくさんある。妻と二人で一年中、一生懸命働き続けてきた。

その努力は少しずつ実ってきた。「妙典のハスはおいしい」と言われ、収穫した海苔の評判もよかった。昭和 50 年前後には、千葉県漁連や銀行などから何度も海苔の品評会などで受賞し、県で一位に輝いたこともある。一生懸命やり続けてよかったとしみじみ思った。

ナガモ（アマモ）の下には無数のイシガニ

二十歳から海苔漁を始めて、本格的に海に出るようになった。海苔漁をしていた場所は今と変わらない。旧行徳漁協の漁業権区域だ。

妙典から海苔漁の区域に船で行くとき、潮が引いてしまうと干潟になってしまい、帰れなくなってしまうから気をつけていた。

船で向かう途中、岸側（現在の塩浜側）はケモク（コアマモ）でいっぱいだった。そこよりも沖側にはナガモ（アマモ）が浅瀬に点在していた。いずれも、潮が引いて干潟になるような場所だ。

終戦後の頃にはこのナガモをとって帰り、しばらく寝かせて発酵させていた。それを母の実家の飯山満（船橋市）のほうで肥料として使っていたこともある。

ナガモの下には、たくさんの魚やカニがいた。イシガニも、それこそいくらでもいた。「赤太郎」と呼んでいた真っ赤に大きく成長したイシガニだ。甲羅の幅だけで 15 センチ以上はあったと思う。

イシガニは大きなハサミで抵抗するから、素手で捕まえようとするとケガをする。でも、手袋などなかったからナガモを抜き、手にぐるぐる巻きにして、手袋の代わりにした。手でナガモの下の砂を掘ると、赤太郎が捕れる。オスの赤太郎がいると、その近くにはだいたい２匹のメスもいるので、一気に３匹を捕まえることができた。

どこまでも干潟が続く海

船で行く途中には、ハマグリがよくとれる場所もあった。

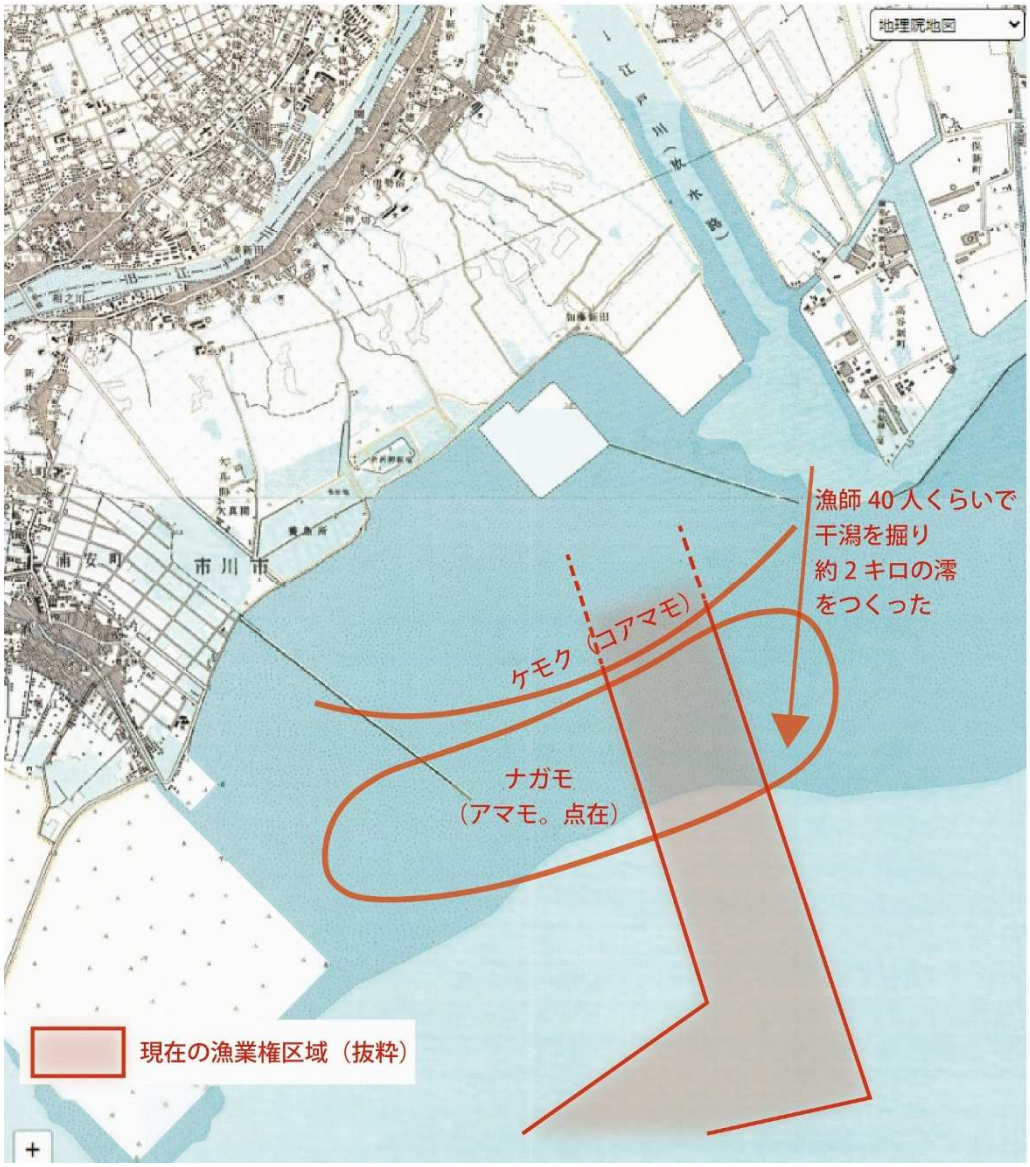
24 歳のときに結婚したが、昭和 35 年（1960 年）頃に妻を連れてハマグリを一緒にとったのをよく憶えている。アサリをその頃とった記憶はない。

潮が引けば、どこまでも干潟が続く海になる。所々、海水が残るような潮だまりもあったが、基本的には干潟だ。行徳や南行徳側の海、つまり現在の塩浜地先の海は、海苔の漁場までずっと干潟が広がっていた。

あまりに浅く、べか舟とはいえ、潮が引くと通れなくなってしまうので、妙典や高谷（こうや）の海苔漁師 40 人くらいで海苔漁場に向けて干潟を掘って小さな澪をつくったこともある。2 キロは掘ったと思う。それほど浅かった。

篠田氏が海苔漁を行い、ハマグリをとっていた頃の海

（昭和 30 年～40 年〔1955 年～1965 年〕の頃）



現在の漁協の建物あたりから現在の浦安Ｄ地区（墓地公園のあたり）まで、広大な干潟が広がっていた。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C)谷　謙二）により作成（昭和 41 年改測・昭和 42.10.10 発行）。

水が悪くなり、カキが付き始めた

20 代、30 代の頃にはたくさんいたハマグリやイシガニは、その後、少なくなっていった。埋め立てや下水処理場の水が影響したのかもしれない。

思い出すと、ハマグリやケモク、ナガモは同時に無くなったように思う。その後、アサリが目立つようになった。

そのうち、干潟にカキが付き始めるようになり、裸足で歩けなくなった。水が悪くなったのだろう。干潟も少しずつ陥没していき、深くなった。当時のような広い干潟がなくなってしまった。

妙典・行徳のハスと小学校

その後、街の再開発でハス田がなくなった。65 歳の頃（平成 11 年〔2001 年〕）には海苔漁師も引退した。

平成元年（1989 年）頃からは、市の栄養士や環境団体、市役所、学校などと協力し、市内の小学校などを訪問し、子どもたちに海苔すき体験の指導をしている。「海苔すき体験」とは、海で収穫した生海苔を手作業で刻み、型にはめて干し、板海苔にするイベントで、子どもたちには大好評だ。

小学校での海苔すき体験（左が篠田氏）

平成 30 年（2018 年）には、妙典小学校の先生方や三番瀬フォーラムなどと協力し、「妙典小ハス田クラブ」を立ち上げた。小学校の親子30 名ほどで毎年楽しくハスを育てている。

私がかつてハスの栽培をしていたのは、この妙典小学校のあたりだ。その場所で妙典・行徳最後のハスの栽培ができていることがうれしい。

小学校でのハス田づくり。左上：ハスの種付け、右上：ハスの収穫、左下：妙典小ハス田クラブ、右下：幸小ハスっ子クラブ

3　市川の沖でアサリが豊漁だったころ

ふじはら　たかお
藤原 孝夫さん

元漁師（海苔、貝捲き）

1941 年（昭和 16 年）生まれ

手漕ぎの船で 1 時間かけて漁場へ

江戸川放水路の近くにある市川市妙典で生まれた。父親は、不動産業をしながら、海苔養殖もしていた。子どもの頃に父に付いていき、海に出て行ったこともあるが、自分が漁師になってからの海と状況は変わっていなかったと思う。私自身は、昭和 32 年（1957 年）に中学校を卒業し、昭和 36 年（1961 年）に定時制の高校（4 年制）を出た。それから漁師として海に出るようになった。冬は海苔漁、夏は建築土木の仕事を 90 日くらいやっていた。

父は、私が高校を卒業して漁師をするようになってから海には出なくなった。自分が海苔漁を引き継いだ。最初の頃は、まだ手漕ぎのべか舟だった。昭和 40 年代になって焼き玉エンジンを付けた中古の舟を買った。

舟は自宅近くの漁協の桟橋あたりにとめていた（江戸川放水路の市川市妙典 1 丁目側。新行徳橋から 300 メートル下流側）。現在の桟橋と同じ場所だ。その頃は若い漁師の舟が 4 隻程度しかなかったと思う。

その桟橋から手で漕いで沖の海苔漁場まで向かっていた（片道 5 キロメートル程度か）。1 時間くらいかかっていた。べか舟で海苔網に入り、手で海苔を摘んでいく作業はたいへんで時間もかかった。漁場への行き帰りも時間がかかるので、帰りが夜になることもあった。当時の海苔は支柱柵に網を張って育てていた。いまのようなベタ流しの漁法はなかった。その支柱柵にはリングもないから、潮が満ちている時間帯に取りに行く。だから、漁師はみんなだいたい同じ時間に海に出ていた。

手漕ぎのべか舟（浦安市郷土博物館収蔵）。海苔漁場にて、べか舟に乗りながら海苔を摘んでいる。写真は戦前のもののようだ。

海苔漁場も干潟だった

大潮のときは、ある程度潮が引いてから漁場に海苔を取りに行っていたが、潮が引きすぎると舟が座礁してしまう。干潟になってしまうからだ。海苔を積んで戻ろうと思っても、戻れないときもあった。潮が満ちるのを待つしかなかった。支柱柵による海苔漁場の水深は２メートルくらい。東京湾の干満差も２メートルくらいだから、のりひび（支柱柵）があるということは、大潮で満ちても水深２メートルくらい。潮が引けば干潟になっていた。

当時は、岸から眺めても、海上はすべて干潟だ。歩こうと思えば、船橋の沖でも、どこでも歩いて行けるような海だった。

その頃の海苔漁はすべて天然で、手作業の漁だった。海苔の種付けも天然。姉ヶ崎（千葉県市原市姉崎）などの海へ行き、海面を借りて網を張り、自然に海苔の種が付くのを待つ。ほとんど博打だ。1 週間から 10 日くらいかけて海水に漬けてから、その網をトラックに乗せて戻り、海苔漁場に舟で運び、海に網を張る作業をしていた。

昼に漁場で海苔を収穫した後、船で自宅へ戻り、夜は「ゴミ拾い」をしていた。「ゴミ」とは、海苔に混ざっている、モク（アマモ）、ウゴ（オゴノリ）、ケモク（コアマモ）のこと。これらを収穫した海苔からみんなで取り除いていた。夜中の１時か２時には起きて、生海苔を叩いてから（刻んでから）、それを漉く。すべて手作業でやっていた。干し方も現在のよ

うな機械ではなく、天日干しだった。

昭和 41 年（1966 年）11 月に結婚したからよく覚えているが、その年の 10 月 25 日に最も早く海苔が採れた。昭和 43 年（1968 年）の海苔の収穫量が最も悪かった。乾燥場を 60 万円かけてつくったが、売れる海苔は 50 万円分しかなかった。昭和 46 年（1971 年）、47 年（1972 年）くらいがいちばんとれた。木更津からも生海苔を買いに来る業者がいたほどだ。

海苔網についた海苔は、最初は素手で摘み取っていたが、その後、海苔ペット※で摘み取るようになった。その後に登場したのが潜水艦※だ。

※ 海苔ペットとは、カッターで海苔を切りとり、掃除機のように吸い込む機械。潜水艦とは、高速摘採船。船の上部に刃が付き、網の下に潜り、効率的に海苔を刈り取る。実際に船が海に潜るわけではないが、潜っているように見えるので潜水艦と言われるようになった。

塩浜の前も当時は天然の干潟

市川側の埋め立てが終わり、昭和 46 年（1971 年）に市川漁港（通称「行徳漁港」）ができた。その頃からはこの漁港に船を留め、ここから漁に出るようになった。船もＦＲＰ製に変え、10 馬力のエンジンを付けた。

昭和 40 年代には腰捲（こしま）きやウェットスーツを買い、ハマグリやアサリをとる腰捲き漁を始めていた。1 カ月に 25 日くらいは腰捲き漁をしていた。現在の漁協の建物の地先（塩浜 1 丁目の先端から見て南側）ではハマグリがとれた。商売にするほどにはとれなかったが、当時はカキもいなかったし、砂地だったのでハマグリがいた。

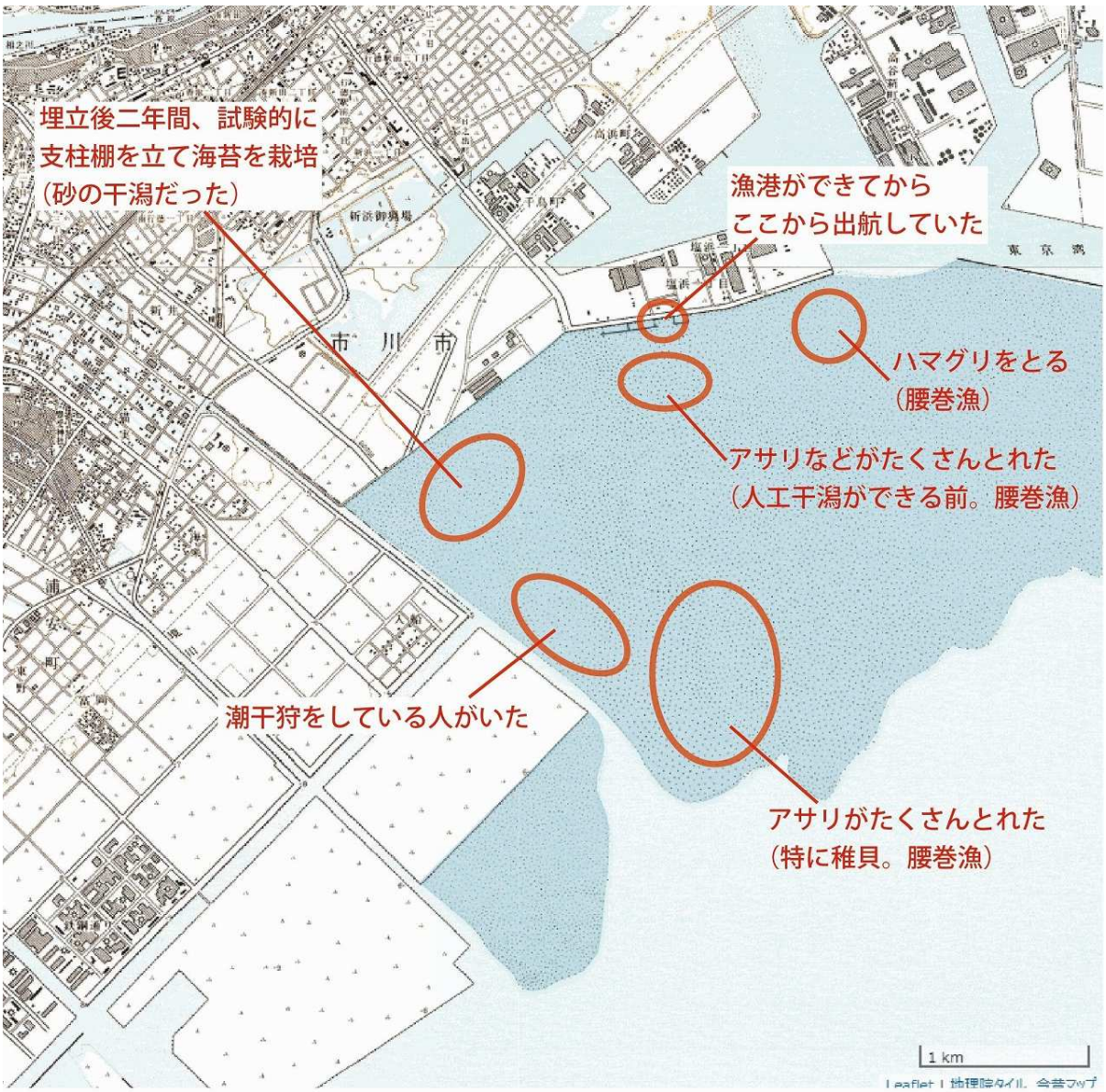
漁港の目の前ではアサリをたくさんとっていた。ハマグリやシオフキもいた。この場所は、その後、漁協が人工干潟を造成したが、当時も腰捲き漁ができるほどの浅さはあり、大潮の最干潮でも水深は 10 センチくらいだった。現在の浦安側のＤ地区（浦安市日の出 8 丁目）の地先でも種アサリ（稚貝）がたくさんとれた。この頃、アサリをとっていた漁師は 20～30 人くらいだろう。みんな腰捲き漁だった。

その後、大規模な青潮が起きるようになり、大きな二枚貝がとれなくなったが、それでも種アサリがＤ地区のほうでとれた。同じ場所でとっても、翌日には同じ量の種アサリがいるのには驚いた。これは、各地に出荷されていた。

市川側の埋め立て後、現在の塩浜２、３丁目の海で支柱柵を立てて試験的な海苔栽培をしたことがある。支柱柵で育てる海苔栽培の場合、下が砂でなければやらないから、当時は浅かったということだ。塩浜の前も天然の干潟だった。しかし、塩浜で違法係留が問題化した頃には干潟はなくなっていた。地盤沈下があったのだろう。

藤原氏が貝捲き漁や海苔漁をしていた頃の海

（昭和 40 年後半〔1970 年～1975 年〕の頃）



塩浜の前も、行徳の人工干潟も、当時は自然の干潟・浅瀬であった。そこでハマグリやアサリなどをとり、海苔の支柱柵も立てて実験的な海苔栽培をした。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷　謙二）により作成(昭和 51 年二改･昭和 53.3.30 発行)。

4　「めっぽり」の海、腰捲き漁の海

みよかわ　かおる
御代川　薫さん

底曳き漁師、市川市漁業協同組合組合長

1953年（昭和28年）生まれ

楽しみな川と海

わが家は旧江戸川の常夜灯の近くにあるので、小さい頃から川や海に親しんでいた。

木の枝を束ねて水の中に沈め、そこに集まった小魚やエビなどをとる「ボサ」をやったり、今井橋の下で鰻をとったりするのを見て育った。鰻とりは、「鰻かき」というかぎ型の鎌を使っていた。

小学生の頃に、現在の行徳の駅前通りの先にある千鳥橋の下あたりで、「なぜこ」をしたこともある。「なぜこ」とは、「なでこ」とも言うが、干潟を手や足でなでながら、カレイなどを捕まえることだ。商売でやっているわけではなく、子どもたちの遊びとしてあった。

当時の千鳥橋あたりは、まだ橋もなく、一面に干潟が広がっていた。舟を使うこともなく、子どもたちは陸から干潟に降りて、なでこをしていた。

いまは埋立地になっているが、加藤新田や湾岸道路の本行徳のあたりで、シャコをとりに行った。新浜御猟場のあたりから、船でオゴ（オゴノリ）をとりに行ったこともある。

旧江戸川を下って、大三角（おおさんかく）のほうにも連れていてもらったことがある。大三角とは、現在のディズニーランドがある辺りで、当時はヨシ原が広がる場所だった。当時は、「しぶと島」と呼ばれていた。「しぶと」とは「死んだ人」の意味だ。いい言葉ではないが、おそらく川や海で亡くなった方々の遺体が流れ着くことがあったからではないか。

鰻かき（御代川氏所蔵）。返しの歯は無く、引っかけた鰻を勢いをつけてそのまま船に持ち上げて捕まえていた。

海で「めっぽり」をしていた

中学 1 年生の頃（昭和 40 年頃）、ハゼ釣りをよくやっていた。旧江戸川の河川敷や船で川を下って釣りをしていた。市川水路のあたりで、べか（べか舟）を漕ぐ練習もした。

「めっぽり」もよくやっていた。これは、「目堀り」の意味だろう。潮が干上がった干潟を歩きながら、ハマグリやアサリをとることだ。ハマグリやアサリは砂の中にいるが、水管が干潟の表面に出てきて、穴のように見える。この穴を「目」と呼び、その下にいるハマグリやアサリを狙って掘っていた。

めっぽりをしていた大人たちからは、目の形などから、その下にハマグリがいるのか、あるいはアサリがいるのかをわかると言われたが、当時の私にはよくわからなかった。

めっぽりをするときは、江戸川放水路から船で出かけていた。

当時は、現在の漁協の建物（市川市塩浜 1 丁目）の辺りから、D地区（浦安市日の出 8 丁目）のあたりまで、大潮になればすべて干潟になっていた。塩浜のあたりももちろん干潟だ。今よりもずいぶん浅かった。

御代川氏が中学生の頃の海

（昭和 40 年～42 年〔1965 年～1967 年〕の頃）。

現在の漁協の建物あたりから現在の浦安Ｄ地区（墓地公園のあたり）まで、広大な干潟が広がっていた。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C)谷　謙二）により作成（昭和 41 年改測・昭和 42.10.10 発行）。

めっぽり（浦安市郷土博物館収蔵）。干潟でハマグリの目のように見える水管を見つけると、この道具でハマグリを掘り起こしていた。浦安市郷土博物館収蔵品データベースによれば、「メホリ」「メボリ」などとも呼ばれていたようだ。

中学 3 年生の頃（昭和 42 年頃）には、バイガイとりの手伝いをしていたこともよく覚えている。

秋の夕方、かなり沖のほうまで船で行き、30 センチ程度の壺型の竹籠に腐った魚の切り身を仕掛けていた。おそらく翌朝にバイガイをとりに行っていたのだろうが、私自身がそれに同行した記憶はない。おそらく私は、翌日学校に通学しており、漁師だけでとりに行っていたのだと思う。

高校時代は一度も海に行っていない。

塩浜の地先での腰捲き漁から底曳き漁へ

高校卒業後、民間企業で 10 年間勤め、その後数年、郵便局に勤めた。休日、知り合いの船に乗せてもらい、再び海に行くようになった。

船と海が好きだったので、24 歳か 25 歳の頃、小さな船を買った。中古の動力船で、全長 12 メートル、幅 1.6 メートルほどの小さな船だ。12 万円だったと思う。当時の給料の 1 、２カ月分の高い買い物だった。

それからは、毎週、休日の度に、その船で海に出た。

本格的な漁業を始めたわけではないが、アサリをとることもあった。浅瀬には海苔網の場所決めのために杉の棒杭が立てられていた。杉の木が２、３本束ねたものであり、「ぼうげ」と呼んでいた。そのぼうげのまわりにイシガニがよくいたので、それを捕まえに行ったこともある。

中学の頃と異なり、この頃にはすでにハマグリはとれなかった。他の人たちもアサリをとっていた。大勢の人たちがアサリをとるようになったのはこの頃からだったと思う。

サラリーマンをやめて漁業を始めたのは、30 歳になってからだ。昭和 58 年（1983 年）からだ。漁師になって最初の 2 年間は、アサリ漁をしていた。当時、アサリはよくとれた。その頃のサラリーマンの平均月収が 15 万円くらいだったと思うが、その 3 倍近くの収入があったときもある。

主な漁場は、塩浜の地先だ。現在の漁港の前でも腰捲(こしま)きをしていた。塩浜地先の海域は、この頃から段々と地盤が深くなっていったように感じる。何らかの原因で地盤沈下をしたのではないか。東日本大震災で地盤がさらに沈下したように思う。

腰捲き漁（浦安市郷土博物館所蔵）。腰と籠をロープなどでつなぎ、籠から伸びる棒をもち、籠をゆする（昭和時代）。籠に入った砂をふるい落とし、中に入ったアサリなどの二枚貝をとる。写真のように、干潟など浅い海域で行う漁法だ。

昭和 60 年（1985 年）、東京湾に大規模な青潮が発生し、アサリが大量に死んでしまった。3 日間ほど青潮は続き※、3 日目には鰻が何十本もあがってきた。青潮のために、アサリ漁ができなくなってしまった。

※ 昭和 60 年（1985 年）9 月に東京湾で発生した青潮は、アサリの大量へい死が確認され、三番瀬で死亡したアサリの重量は 3 万トンと推定されたという（風呂田利夫「東京湾の生態系と環境の現状」（沼田眞・風呂田編『東京湾の生物誌』築地書館、1997 年）22p）。

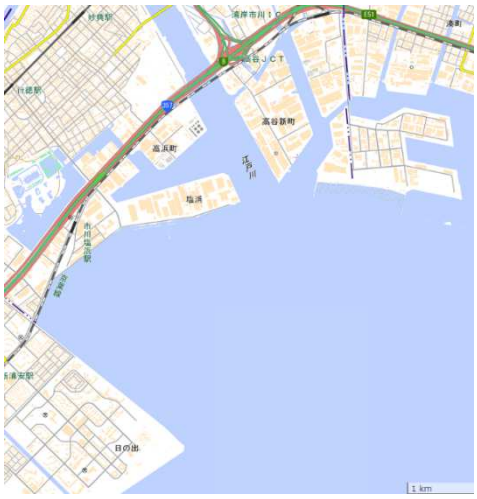
アサリがとれなくなったので、しばらくの間は、刺し網漁をしていた。昭和 62 年からは底曳き漁に切り替えた。ジガレイをよくとっていた。「ジガレイ」とは、イシガレイのこと。マコガレイは「マコ」と呼んでいた。

最近では、15 年くらい前から、ホンビノスをとっている。元々はいなかった二枚貝で、タンカーなどのバラスト水によって外国から入ってきた貝だが、この辺りで急速に増えて、漁の対象になった。

御代川氏が腰捲き漁をしていた頃の海

（昭和 58 年〔1983 年〕の頃）

※浅瀬の図は、千葉県が調査した平成 23 年度の深浅図における 2 m以浅の部分を追加した。



昭和 58 年には現在の地形へ。主な漁場は、塩浜の地先。現在の漁港の前でも腰捲きをしていた。塩浜地先の海域は、この頃から段々と地盤が深くなっていった模様。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C)谷　謙二）により作成（浅瀬の図を追加）。

5　塩浜の前は干潟だった

さわだ　ひろかず
澤田 洋一さん

貝捲き漁師、市川市漁業協同組合理事

1951 年（昭和 26 年）生まれ

ハマグリをとりに干潟へ

私は、浦安市当代島で生まれ育った。父、祖父とも漁師だ。海苔やアサリ、夏にはハゼ釣りの遊船をやっていた。アオギスの脚立釣りに使う脚立が家にはあった。おそらく祖父が商売でやっていたのだろうが、私の時代ではもう無かった。「赤タン」と呼ばれる 4 馬力のエンジンが付いた全長 10 メートルくらいの船と動力無しの木造のべか舟があった。べか舟には帆が付いていた。

小学生の頃、家の近くを流れる江戸川へ行き、潮が引いた川辺の干潟でよくゴカイを掘って売っていた。バケツ一杯で 70 円だった。当時、1 日 10 円の小遣いだったから、いい小遣い稼ぎだった。干潟は主に泥で、手で掘ると片手分のゴカイがとれた。手を入れてもケガをしない、きれいな泥だった。それを吉野屋※に持っていったものだ。

※ 吉野屋：古くからある浦安の船宿。山本周五郎の『青べか物語』（新潮文庫）に登場する「船宿 千本」のモデル。

海にもよく遊びに行った。猫実の先は、潮が引けばどこまでも干潟が広がっていた。秋山の金魚池（金魚の養殖場）のあたりから、沖に向かって干潟を歩き、ハマグリをとっていた。

５、６年生の頃（昭和 37 年～38 年〔1962 年～1963 年〕）、金魚池の下のあたりで服を脱ぎ、パンツ 1 枚になってハマグリをとりに干潟に入った。ハマグリがとれるのが楽しく、どんどん干潟の先を歩いた。3 キロ、あるいはもっと先まで歩いたかもしれない。潮が満ちてきたので戻ったが、すでに服を置いていた場所まで潮が満ちてしまい、服が無くなっていた。パンツ 1 枚で家に帰ったら、親からずいぶん怒られた。

浦安も行徳も干潟が広がっていた

中学は浦安中学校だ。当時は猫実１丁目にあった。学校のすぐ近くに秋山の金魚池や海楽園跡（潮干狩りなどをする元・行楽地）があった。海も近くだった。このときもよく海に行っていた（昭和 39 年～41 年〔1964 年～1966 年〕頃)。

旧江戸川の河口には、広いヨシ原があった。そのあたりでハゼなどの釣りをしていた。ヨシが茂っている場所の海辺ではハマグリもいるので、ハマグリもとった。

土手を歩いて、市川市の行徳のほうにも行っていた。市境のあたりに「きりしお」と呼ばれた池があり、そこで泳いでいた。戦争中にＢ29 が爆弾を落としてできた穴が池になったそうだ。きりしおを越えると行徳だ。丸浜養魚場があり、その先には宮内庁の新浜鴨場がある。そこまではたまに行っていた（現在の市川市南行徳、福栄、新浜)。海岸線は、現在の塩浜の海岸線から 500 メートルほど内陸側だが、土手から見える海側（現在の塩浜）の景色はぜんぶ干潟だった。浦安側と同じく、行徳（塩浜）の海は潮が引けば数キロ先まで干潟が広がっていた。

浦安と行徳の干潟はほとんどが砂だ。泥ではない。ハマグリがとれる海だった。ナガモ（アマモ）を見た記憶はない。ナガモは浅瀬の中でもすこし深いところに生えているので、そこまでは歩いて行っていなかったのだろう。

海苔ひびに覆われていた行徳の海

高校に行ってからは、江戸川で釣りはしていたが、海にはあまり行っていなかった。高校の修学旅行の頃に東西線が通ったと思う(東西線の東陽町―西船橋間開通は昭和 44 年〔1969 年〕)。

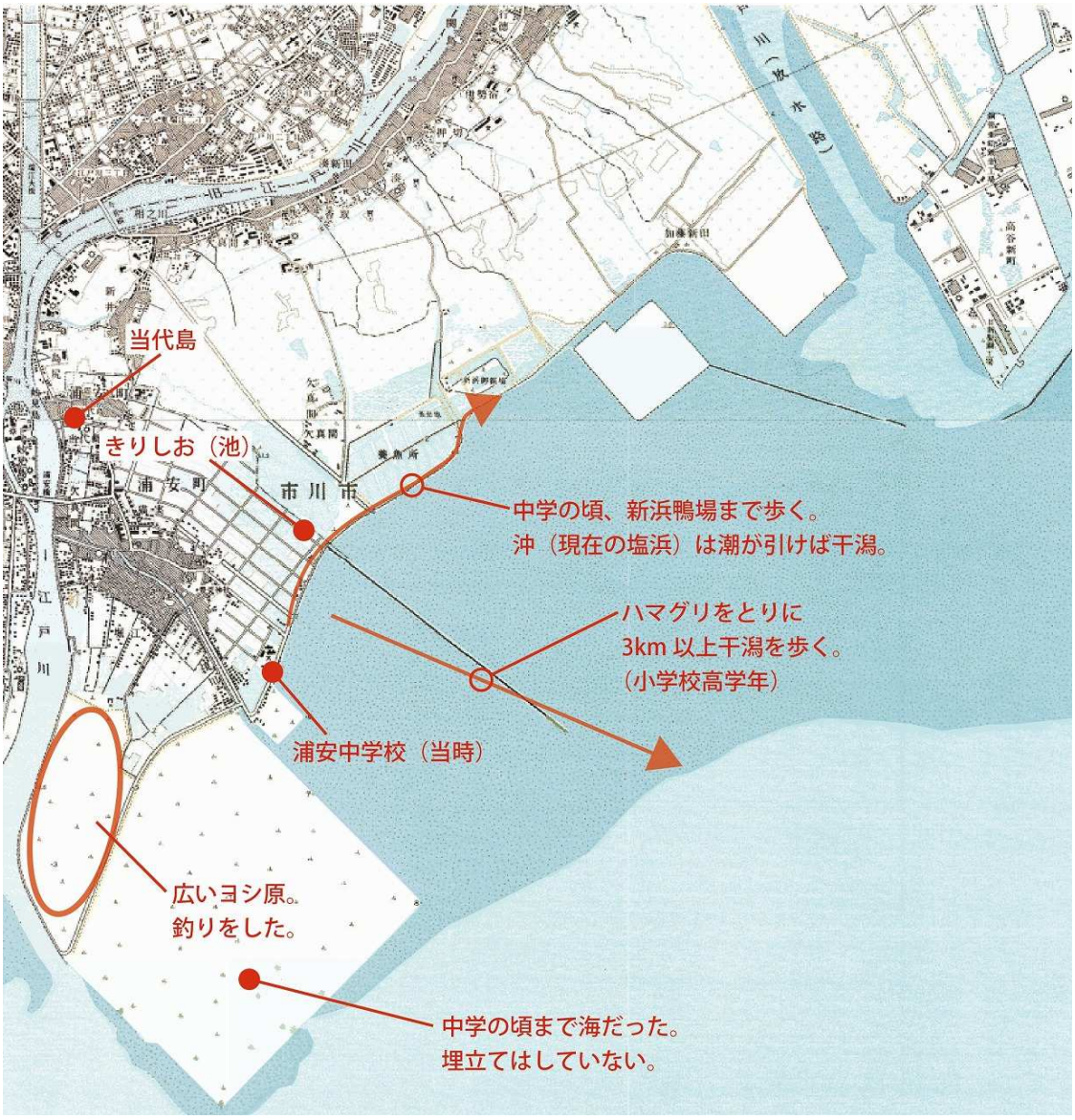
高校卒業後に秋葉原の会社に勤め、秋葉原、柏、本八幡で働いた。その後、上野で中学の同級生と飲食店に勤めたりしたが、24 歳の頃に浦安に戻った。

21 歳のとき（昭和 47 年〔1972 年〕)、40 馬力の船外機を買い、海に出た。船で行徳の海にも行っていたが、当時は海岸線から 50 メートル近く前まで竹の海苔ひびがビッシリ立っていた。海が海苔ひびに覆われていたということは、海苔の漁場が広がっていたということだ。

そうした海を船で通っていたら、船のプロペラがナガモ（アマモ）に絡まり、船が動かなくなってしまったことがある。行徳の海苔漁師が私を見つけ、高谷（こうや）の船溜まりまで引っ張っていってくれた。

澤田氏が小学校高学年から中学生の頃の海

（昭和 40 年～42 年〔1965 年～1967 年〕の頃）。



当時の浦安や行徳（塩浜）の地先は、海岸線から 3 キロメートル以上歩けるほど、広大な干潟が広がっていた。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」（(C)谷　謙二）により作成（昭和 40 年改測・昭和 42.10.10 発行）。

行徳で遊船を始めた頃の海

昭和 51 年（1976 年)、25 歳のとき、行徳の駅前通りで澤田釣具店を開業した。その前にも浦安側の現在のＤ地区のあたりの干潟で潮干狩りの仕立て船をやったりもしていたが、店を出して本格的に遊船も始めた。

このときには既に浦安側の埋め立ても終わっていたと記憶している※。また、現在、沖の大洲と呼ばれるＤ地区の地先の干潟は、その頃から段々と大きくなったように思う。

※ 浦安市ウェブサイトによれば、昭和 53 年（1978 年）9 月 26 日にＤ地区であるエリア 13.77 平方キロメートルが日の出、明海の地名で市域に加わっている。1976 年の時点で既に周囲の埋め立ては終わっていたのだろう。
https://www.city.urayasu.lg.jp/shisei/profile/profile/1000013.html。2025 年 2 月 11 日確認。

船を市川水路に留めて、そこから出航していた。江戸川放水路を真っすぐ沖に出る。手前にイシガレイ、その先にマコガレイが釣れるポイントがあった。

塩浜 1 丁目の地先 100 メートルくらい先にはまだ海苔ひび（支柱柵）があった。

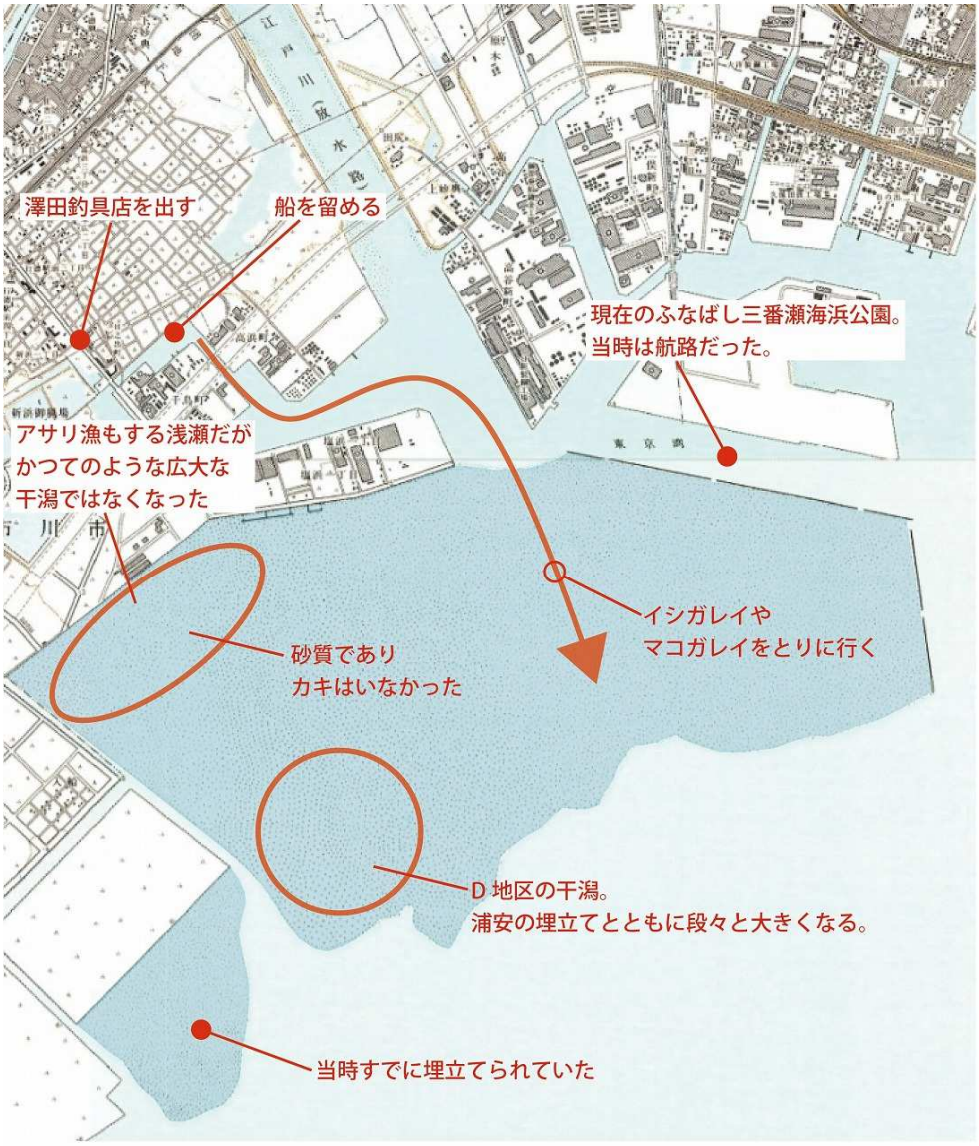
塩浜２、3 丁目の地先の海は、小中学生の頃に見たような広大な干潟は出なくなっていた。ただし、今のような深さではなく、腰捲（こしま）き漁でアサリがとれるような砂の浅瀬だった。私もアサリもとっていた。現在、塩浜２、３丁目の海域にはカキ礁が広がっているが、当時はカキを見ることもなかった。

その後、干潟の地盤沈下がさらに進み、下水の影響もあって、水が悪くなっていった。アナアオサが堆積して腐り、砂が泥っぽくなっていった。アサリがいなくなり、カキが増えていったのは環境が悪くなったからだ。

30 歳の頃には（昭和 56 年〔1981 年〕)、違法係留の船が増え始め、その後、沈船も増えていき、環境がますます悪化していった。

澤田氏が遊船を始めた頃の海

（昭和 51 年〔1976 年〕の頃）



塩浜２、３丁目の地先の海は砂の浅瀬だったが、小中学生の頃に歩いた広大な干潟は無くなっていた。その後、さらに地盤沈下が進み、環境も悪化していった。

出典：時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷　謙二）により作成（昭和 51 年二改・昭和 52.10.30 発行)。

6　聞きとり調査結果をもとに、これからの三番瀬と街づくりを考える

お話を伺った 4 人の方々は皆、記憶が明瞭であった。

篠田氏は現在 88 歳になるが、海苔漁を始めた 60 年以上前の 1960 年前後の海の状況について、まるで最近見たかのように、手を大きく広げながら、「ケモク（コアマモ）やナガモ（アマモ）がこう広がるところを舟で抜けて…」と話していた。

藤原氏は、1970 年代前半などの海の状況について、腰捲（こしま）き漁によりハマグリやアサリをとっていた具体的な海域を語っていた。

御代川氏の場合、高校時代に海に行っていない。この期間（1968 年～1970 年）は、近隣の埋め立てが進み、また海洋汚染が深刻化していた時期でもある。その前後で、海環境が大きく変貌した時期だとも言える。御代川氏の記憶は、海に行っていなかった高校時代を挟んでいるために、その前の記憶とその後の記憶が峻別されていることから、前後の環境変化についてよく覚えているのかもしれない。当時の状況を克明に話していた。

澤田氏も御代川氏と同じく、高校時代にはあまり海に行っていなかったために、前後の環境変化をよく認識していた。25 歳（1976 年）で遊船を始めた頃の海の環境変化に驚いたことを具体的な事例をいくつも挙げながら詳細に語っていた。

塩浜地先の海域は干潟だった

現在、市川市は、塩浜地先の海域において干潟再生に向けた覆砂事業を予定している。

この海域が、実はもともと干潟であったという話は、これまでも漁師のようにこの海域を利用していた地元の人々の間では長く語られてきた。今回の聞きとり調査によって、このことが改めて裏付けられた。

篠田氏は、現在の塩浜の地先は干潟であり、陸側の海域には「ケモク」が広がり、その沖合には「ナガモ」が広がっていたという。篠田氏には、海草の写真を提示し、「ケモク」がコアマモであり、「ナガモ」がアマモであることを確認した。

現在も広大な藻場が広がる富津干潟で観察すればわかるように、陸側から海に入れば、まずコアマモの群落が広がり、その先にアマモの群落が広がる。そして、コアマモが育つ場所は、大潮の最干潮になれば、広大な干潟となる。アマモの群落がある箇所でも、場所によっては干潟が出る。

藤原氏は、1970 年代前半、塩浜前の海域において 2 年間、試験的に海苔栽培をしている。海底に広がる砂の上に支柱柵を立てていた。潮位によっては砂の干潟が出る海面だったと述べている。

御代川氏は、中学の頃にこの海域が一面にわたって干潟であったと述べている。そこで「めっぽり」をしていたということは、干潟を歩いていたことを示している。さらに、30 歳の頃のアサリ漁場の一つが塩浜地先の海域だったとも述べている。ここで「腰捲き」によるアサリ漁をしていたということは、潮位によっては干潟が出るなど、かなり水深が浅いことを示している。

澤田氏は、浦安から宮内庁の新浜鴨場に向かう土手を歩きながら、現在の塩浜海域を含む海を眺めると、数キロ先まで干潟が広がっていたことを語っている。

やはり、塩浜地先の海域は、もともとは、現在の干潟が干出しないような深さであったわけではなく、以下に述べるような何らかの要因によって深くなってしまったと考えるのが適切だろう。

調査結果から市川市の覆砂事業を考える

市川市が 2003 年（平成 15 年）に編集・発行した『三番瀬の再生に向けて　―地元市川市の挑戦―』には、次の記述がある。

「昭和 30 年代から 40 年代には急速な工業化・都市化に伴い、地下水や天然ガスを汲み上げたため地盤沈下が発生した。軟弱な地盤の行徳地区では、昭和 35 年頃から急激な地盤沈下が起こり、最大で、2 メートル沈下した箇所もあった。

海の中には地盤沈下の測定値がないが、過去の海図によると、現在の護岸から 2.5 キロメートル程度先まで干潟が続いていたことがわかる。今では、その広大な干潟がほとんど水没してしまった。」（同書 20 ページ）

このように地盤沈下の原因として、地下水等の過剰採取を推定している。高度経済成長の当時、陸域では、工業用水などに利用するために大量の地下水が汲み上げられ、地盤が大幅に沈下したことは有名だ。その地下水脈は陸の下から海の下にもつながっていることに鑑みれば、こうした推測には説得力があるように感じる。

市川市の覆砂事業は、塩浜地先の海域において、近くの三番瀬海域内で浚渫した土砂を利用した覆砂を行い、干潟を再生させようとするものである。覆砂するエリアのうち、塩浜護岸近辺は特に深くなっており、A.P.－1.5～－2 メートルの水深がある。しかも、沖に行くほ

ど浅くなる構造になっている。言うまでもなく、本来の干潟・浅瀬の形状は、沖に行くほど深くなるわけだが、ここでは逆転している。市のモニタリング調査結果を見ると、護岸直下の深い箇所では生物の数も種類も貧弱であり、沖に行くほど、浅い砂泥質の土砂を好む生物が増えている。

聞きとり調査により、塩浜地先海域の本来の自然環境が干潟域であったことが明らかとなった。このことは、今回の覆砂事業が本来の自然環境に近づけようとする試みであることを支える大きな根拠の一つとなるだろう。

ネイチャーポジティブの時代、三番瀬の再生へ

目を日本や世界に目を転じれば、いま、時代状況は大きく変わっている。

2022 年、生物多様性条約第 15 回締約国会議にて合意された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」では、生物多様性保全に向けて 2050 年の 4 つのゴール、2030 年の 23 のターゲットを示している。2050 年ゴールの一つには、自然生態系の面積を大幅増加することが掲げられ、2030 年ターゲットの一つには、陸域・海域の少なくとも 30%以上を保全するという「30 by 30（サーティー・バイ・サーティー）」が示された。

日本もこの枠組みに合意しているものの、現状は厳しい。合意時点での日本の現状は、陸域 20.5%、海域 13.3%の保護地域しかない。そこで政府は、2023 年に「生物多様性国家戦略 2023-2030」を閣議決定し、「ネイチャーポジティブ（自然再興）」の実現に向けて政策を転換した。これは、2050 年の「自然と共生する社会」を見据え、2030 年までに自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させるというものである。

こうした動きは、三番瀬の自然再生と海辺の街づくりの試みが、国際的な観点からも、日本としての観点からも極めて価値のあるものであることを示している。

東京湾の環境変化は歴史的にみて著しいが、忘れてはならないのは、この変化は人為的なものであるということである。

人が傷つけてきた自然を、自然の力を生かしながら、人が再生させていく。それを街づくりの中に位置付ける。

いま、私たちに求められていることは、そうしたことなのではないだろうか。

回想「豊穣の海」　三番瀬 聞きとり調査レポート
2025 年 3 月 26 日　初版発行

著者：　特定非営利活動法人三番瀬フォーラム・東京海洋大学沿岸域管理研究室
制作スタッフ：
　聞きとり：安達宏之、田中有里
　執筆：安達宏之（はじめに、第 2 章～第 5 章)、石塚誠（第 1 章）
　図版制作：宮本裕一郎
　校正：小松美加
発行者：　特定非営利活動法人三番瀬フォーラム